

# 山と博物館

第18巻 第8号 1973年8月25日 大町山岳博物館



唐沢岳二ノ沢最大の滝(約70メートル)

撮影 栗野栄宏

## 山博は市民とともに

山岳博物館の国または県への「移管論」がでてすでに久しい。一般的に、財政規模の小さな市町村では、博物館を維持すること自体むづかしいというのがその理由である。だから大町市でも、老朽化したその建物を新築または改築するという段になると、改めてこの「移管」について論議をよぶことになる。行政サイドでは、「かもしか」や「らいちよう」の研究は国家的な事業だから、国立が県立にするのが当然だとおエラ方うがった主張をする。それはそれとして、山博をもっとも愛する人たちでさえ、この際、「移管」も已むを得まいとする空気が強い。中途半端な現状から一刻も早く脱却して、国や県の力でもらう博物館にしてほしいという気持ちであろう。

しかし、その複雑な心情は理解できるとしても、私はこの「移管」には絶対賛成できない。大町市民から離れた山博には何の価値も魅力も見出せないからである。軽卒に「移管論」を説くことの無責任さを猛省すべきである。

山博は公民館や図書館と同じように大切な社会教育機関であるということを忘れてはならない。しかも、山博が多面的な機能を発揮して社会へ大きく貢献しつつあることを思えば、経済的には山博の経費は実に安価であるといわねばならない。

いま、大町市を中心とする北アルプス山麓一帯は、自然破壊、公害、観光開発など市民生活に関係する多くの問題に直面している。このなかで山博の果たす役割は大きいはずである。山博はこれらの地域課題に対処して、市民とともに「地域づくり」のための活動を展開すべきである。このような積極的な姿勢を通じて、山博をよりいっそう市民から信頼され支持されるものにしなければならない。市民が山博を自発的に維持したいと意識したとき、建物はたとえボロであっても、それだけで目的を達しつつあるといえよう。

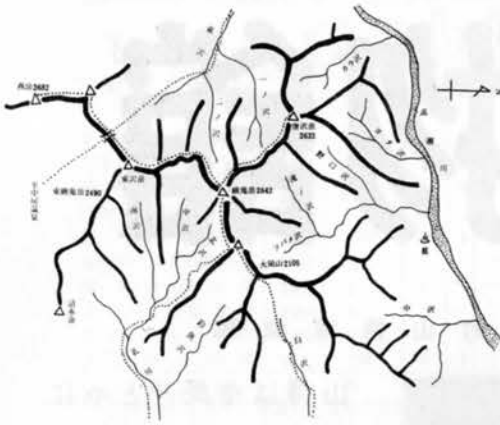
(内山慎三)

# 唐沢岳 滝ノ沢廻行

奥村雅彦

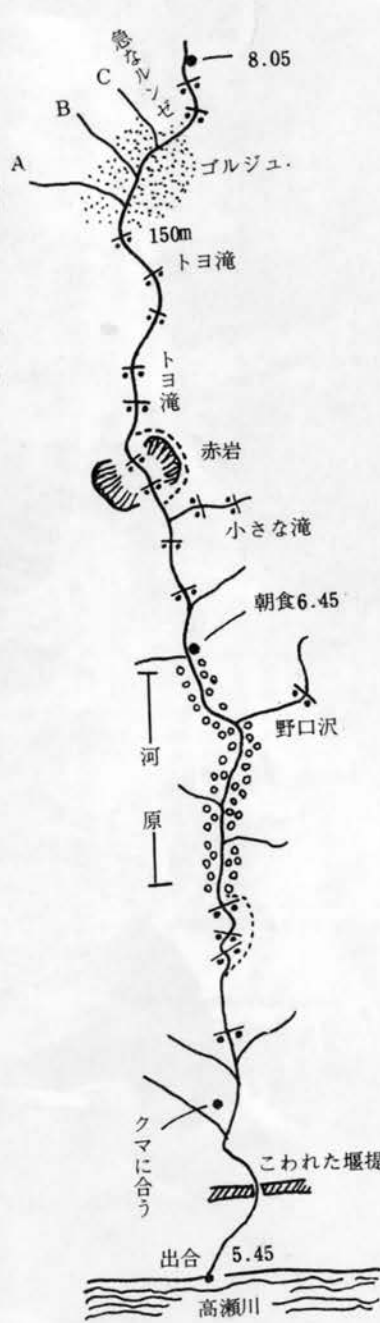
私達の会は発足当初から、北アルプスを練成の場として、地域の開発に力をそそいできたところであるが、その中でも特に未知の地域が多い餓鬼、唐沢岳の開発に集中してきた。最も未知であった唐沢岳の開発に五年の歳月を費やし、一応の開拓期が過ぎて、パリエーションの開発に七年、一昨年夏及び昨年の冬季に最後に残された幕岩の登攀によって、ようやく唐沢岳の全ての開拓にピリオドを打った次第である。

しかしほんの一部にしか過ぎない唐沢岳もその隣には本山というべき餓鬼岳があり、この山自体が前山であり、周囲全部の開拓がまだ全部すんでいないことが先年より大きな魅力となつて私達をこの地域へと誘い始めた。まず第一に最も入山しやすい常盤口の白沢ルートは入山にも便利な点もあつて、私達は暇



餓鬼岳周辺概略図 作図 長 沢 修 介

頂上に合流し、白沢ルートを下降する。このことによつて、餓鬼岳をめぐる全ての地域を全部解明することを目的として、今夏の夏の合宿に取り組んだ。計画の第一段階として、六月下旬から各ルートの研究及び下見山行を何回か重ね、最も休暇の多い八月十三日第一次入山、十六日第二次入山の二つに分れ、当初の計画通り全てを終了した。



滝ノ沢廻行図(1) 作図 降 旗 厚

ここに報告するのはその一部滝ノ沢隊の登攀記録である。

### 廻行の日記

一九七三、八月十四日～十五日

我々山の会が唐沢岳とその周辺の岩場、沢に目を向け始めてから15年近い歳月がたつてゐる。その今日でもまだまだ未知の沢、岩壁が残されている中で、我々は今夏季期合宿を済ませているいくつかの沢の解明のために組んだ。その一つに滝の沢がある。七月中の二回の偵察で、その名の通り滝の多い沢であることが解り、完全廻行にはかなりの時間を要するのではないかと初めから懸念していた。

八月十四日

大町を朝五時に出て、高瀬川上流の葛温泉に向かう。本格的に始まった東京電力のダム工事も、朝まだ早いにもかかわらずそりとしてゐる。高瀬川と滝の沢との出合まで車を進め、五時五十分には廻行開始。ここも平地同様の水

不足で、それほど水量はない。不協和合流の典型のような沢で出合の沢幅に比べて、入つて三十分行の所では五倍近い沢幅になつてゐる。こわれた堰堤を過ぎて間もなくトロ状の三段の滝に出合う。こは偵察時同様、滝の沢よりツバメ沢を経て餓鬼岳へ至るコースの、今は廢道となつてしまつてゐる高巻ルートを通り、再び広い沢に降りる。

六時半には野口沢との出合に着く。野口沢は滝の沢の支流では最も大きな沢の一つであろう。この沢については、数年前に我々の会の初の完全廻行の記録がある。

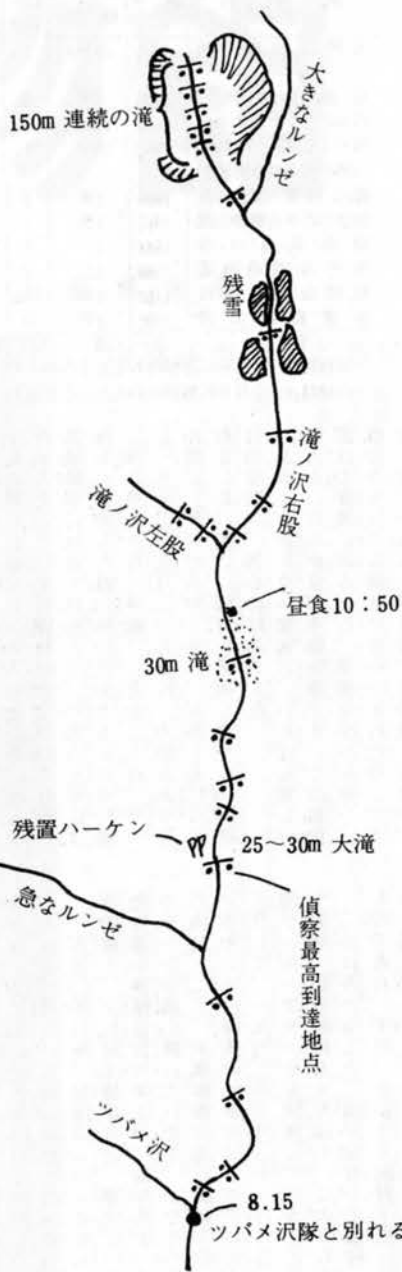
沢の巨石の間をくぐるようにぬけたり、チムニー登りをしたり、あまり沢登りの経験のない私達のパーティーにはすこぶる快適な沢登りである。

しばらくすると両側が急に狭くなり、空がわずかしか見えない深い所を通る。側壁の高さは、百米は楽にあるようだ。なにか異様な感じのする所で、ここで鉄砲水にでもあつたら一コロだろう。

八時十五分に、今までいっしょに來たツバメ沢の隊と分れる。彼等の沢もアルバイトが大変なように思われ、お互いの健闘を奮い、元気で頂上で会うことを約束して握手で別れる。

八時三十分、最初の難関、二十米の大滝に出る。偵察の時は正午に來たところであるが

をつくつてはこの地域の入山に心がけ、この地域の開発は昨年迄にすませた。しかし高瀬川に沿つた地域、滝の沢流域、及び本沢流域の一ノ沢、二ノ沢流域は全然空白の地域であり、もう一つ乳川流域については数年前の記録があるのみで全て未知数のものであつた。今夏の合宿を計画するにあたり、全ての参加者が「全員餓鬼岳の頂上を極めましょう」を合言葉に各ルートより餓鬼岳集中の計画を立案し、次の各ルートより餓鬼岳へ集中した。A、縦走隊 女子部の新人により構成。蝶ヶ岳、常念、燕を経て餓鬼岳に集中。B、乳川流域隊 二隊を構成。南沢、及び北沢に主力をおく予定であつたが、結果的に南沢のみの開発となつた。C、滝ノ沢流域隊 滝の沢、ツバメ沢の二隊を出し、二つの完全廻行を目的とする。D、本沢流域隊 一ノ沢、二ノ沢に二隊を入れ、各沢の完全廻行を行なう。以上の各ルートより入山し、全員が餓鬼岳



今日のペースはかなりのハイピッチだ。高瀬川との出合の水量に比べると、この辺の水量はどこから流れ込んでくるのか、倍ほどの水量である。滝の右側は上部の抜ける所が、二段のハンクになっていて、左側は二本のバンドがあり、登れそうだが、今までと違い慣れない地下足袋姿、軽いいいながら、フリクシヨンは効かず、そのすべることが気がかりで何とも不安である。十米位登った所からシヤワークライム・ホルドのないぬれた壁を強引に登る。セコンドからはザイルをつかんでザイル登り。ハーケン六本使用。偵察時ではかなりの時間と踏んでいたが、意外に十分で全員登ることができた。

滝の一番上に二本の下降用と思われる残置ハーケンがあった。おそらく、餓鬼岳より派生している尾根からここを下降したものとと思われる。

滝を乗り越えたのもつかの間、目の前はすべて滝の連続であるが、いざ取付いてみると意外に簡単に登ることができた。

最初の大滝を過ぎてから二時間、二つめの大滝である。スケールは前のもの同様三十米位であるが、両側はゴルジュ。滝の流れが二つに分れる右側からのシヤワークライムで取

り付き、ハーケンなしでぬけることができた。この付近から正面に餓鬼岳と唐沢岳との稜線上の、通称コブが見えてくる。しばらくして沢は大きく右俣と左俣に分れる。左俣はすぐ二十米の滝でふさがっている。我々は右俣に登ることにする。十米位の滝を三つほど過ぎて、夏期においては唐沢岳、餓鬼岳の沢ではいづれも残雪はないと思っていたが意外にもしばらくは、雪渓のシエルンドの下をくぐるはめになってしまった。

雪渓を過ぎて滝の沢上部に近づくとつれて滝と滝との間隔がせばまってくる。ハーケンホルトの少なさが気にかかる。沢全体が滝である。側部は垂壁でその上は今にも崩れてきそうな崩落地帯である。坊さんを連れて登りたいような所である。

連続滝の末端から右側に、かなり大きなルンゼが走っている。割合としっかりしたルンゼであるから、これを登り高巻することにすると上部が全部一目で見わたせる。この上部を登るには数十本のホルト連打を必要とするだろうが、最後は三つに分れており、いづれも上部は崩落地帯となっていて、足を置け

ば崩れそうな礫と砂である。この不安定な急斜面の登行は、岩の登りよりも何倍かの勇氣が必要だろう。我々はこの上部のわずかの地域を残して、このまま尾根通りに進むことにする。

最初は比較的楽なヤブコギだったが、砂地に草のはりついた斜面を何回も通過する。下を見ると、もし足をふみはずせば百米は落ちてしまいそうな滝の上部である。滝登りよりどれほど慎重に登らされることか。

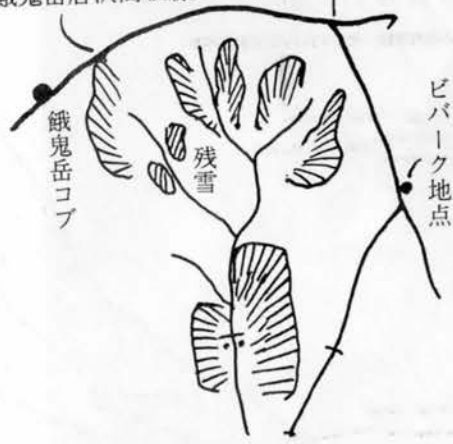
四時過ぎに、野口沢へ走る尾根とのジャンクションに出る。ここでビバーク。

今朝、登り始めた時にクマに出会った驚きが、夜の闇と共に一層胸に残り、灌木のざわめきにも又クマが来たのではないかと聞き耳をたて、不安な一夜を過ごした。

八月十五日  
五時にビバークサイトを発つ。この尾根はきれいに整備された登山道の様な獣道がいたるところにある。おかげで随分楽になった。この辺一帯は、唐沢山系の中でもカモシカの生息数の多い所のように思われる。

滝ノ沢行図(2) 作図 降旗 厚

15日8.00稜線 餓鬼岳唐沢間稜線



滝ノ沢行図(3) 作図 降旗 厚

稜線に近づくにつれて、尾根の最後のつめは崩落地帯に変わった。わずか二十米を登るのに不安定な登りで冷汗をかいてしまう。このあたりで稜線からツバメ沢隊のコールの音が聞える。あとで聞いたところによると、彼等のパーティーは初日で稜線を抜けて、餓鬼岳の小屋で泊ったそうである。我々は勇氣百倍、ヤブコギを続け、午前八時には稜線に飛び出した。

文献等を見ると全く資料がなく、登攀記録もない。この沢の選行は初めてらしい。時間的にも、距離的にもそれほど長くはなかったが、大小の滝をいれると少なくとも四十近い数の滝である。二、三の滝を除いてはフリークライムであるが、かなりの登攀装備が必要だ。又上部は崩落地帯であるために、毎日のように変っている状態である。ちょうど我々が登った時期は記録的晴天続きのために、水量が比較的少なかったことも幸いした。

(十四日) 高瀬出合 5:45 ↓ ツバメ沢出合 8:15 ↓ 滝の沢左右出合 12:00 ↓ ビバークサイト 4:00

(十五日) ビバークサイト: ○ ○ ↓ 稜線 8:00

(大町山の会会員)

# ニホンカモシカの飼育状況について(2)

小森 厚

ニホンカモシカの飼育経過の第二期ともいえる一九六〇年代は、その繁殖をめざしてのはげしい競争が、飼育園館のあいだでくりひろげられました。この競争に参加したのは、大町山岳博物館を皮切りに、一九六〇年から六三年にかけて新たなオス、メスを手に入れた京都市動物園、一九六二年に飼育を開始した三重県御在所岳の日本カモシカセンター、一九六三年に神戸市森林植物園に特別な飼育所を開設した神戸市王子動物園の四園館に、さらに、一九六五年には富山県教育委員会が立山にカモシカ自然園を設けて、これに加わったのです。

ニホンカモシカの飼育下繁殖の一番乗りは御在所岳の日本カモシカセンターでした。一九六四年六月一七日、同センターのメス、ド

全国のニホンカモシカ飼育状況一覽 (1973.3.31現在)

園 館 名	飼 育 始 期	1973.3.31 総 数	内 訳		
			野生 捕獲	飼 育 下 繁殖	計
大町山岳博物館	1956	11※△	8	3	3
京都市動物園	(1955) 1960	6※	3	3	3
日本カモシカセンター	1962	13※	3	10	5
神戸市立王子動物園 (神戸市森林植物園)	1963	10※	1	9	4
富山県風土記ケ丘公園	1965	7※	3	4	4
仙台市八木山動物園	1967	1※	1	1	1
岐阜県高山市動物園	1967	1	1	1	1
あやめ池動物塔	1969	2	2	1	1
和歌山動物園	1970	6※	2	5	1
和多	1972	2※	0	1	1
計		59	27	32	21

※1973.4~7月中に増加のあるところを示す  
△1973.4~7月中に転出のあるところを示す

ラが、メスの子をうみ、その子はロンと名付けられました。ところが、母親のドラが、その前年の交尾期は野外に脱出していたことから、ロンは、野生のオスとの間にできた子ではないかというクレームがつかまりました。しかし、母親のドラは、そのクレームをはねとばすように、翌一九六五年八月二日に、同センターに飼育されていたゴンとの間にメスの子をうみ、真正正銘の飼育下繁殖の一番乗りの栄誉を獲得したのです。このときの子はチコと名付けられ、後に飼育下第三世の一番乗りという手柄を立てたのです。

このときの繁殖競争のデッドヒートはまことにはげしいもので、御在所のチコとは、わずか十三日ちがいの一九六五年八月二十五日には、神戸市森林植物園のカモ吉、シカ子の間にメスの子がうまれ、初子と名付けられました。その後、御在所岳と神戸とは、毎年、順調に繁殖をつづけてきました。

大町山岳博物館では、残念なことに、飼育下最古参の記録をもつメスの岳子が、新入りのオスをどうしても寄せつけなかつたので、繁殖競争にはおくれをとって、一九六九年には後から参加した富山県の立山カモシカ自然園(後に風土ヶ丘に移転)に先をこされ、やつと一九七〇年五月二十九日に、大助とあつ子の間に、オスの子がうまれ、太郎と名付けられました。実に、飼育を開始してから一四年目の成功で、苦心の結晶でした。

ニホンカモシカの繁殖で、いちばん苦しい努力をしたのが京都市動物園です。この動物園は市街地にあるため、環境条件が最悪で、親のカモシカも病気になるやまされたりして、きました。一九六七年以来、三年間つづけて、子どもがうまれたのですが、いずれも前年ほどで病死してしまつたのです。しかし、京都市動物園あげての努力で、一九七〇年七月八日にうまれたオスは、無事、元気に成育し、テツと名付けられて以来、繁殖も順調になり、今年一九七三年に、生後二か年で第三世をうむという記録をつくりました。

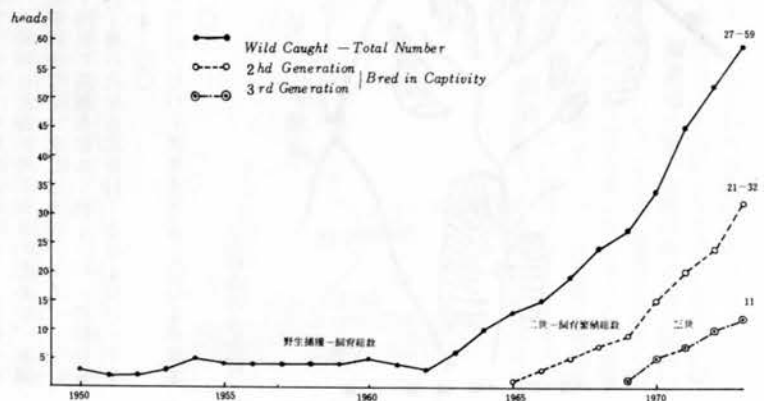
こうして、第二期での繁殖競争に参加した五園館は、いずれも繁殖に成功し、一九七〇年のおわりには、この五園館で飼育されている合計三十九頭のニホンカモシカのうち、二十二頭は、飼育下で繁殖したものになりました。この頃には、飼育園館として、仙台市八木山動物園(一九六七年より)、岐阜県高山市(同、ただしメス一頭のみ)、奈良県あやめ池動物園(一九六九年より)、和歌山県大塔村(一九七〇年より)が加わり、大塔村では一九七二年に繁殖に成功しています。さらに、一九七二年一〇月には、御在所岳の日本カモシカセンターから、東京都多摩動物公園に二頭のカモシカが移されましたが、この二頭が、今年一九七三年には繁殖に成功しています。一面、東北六県の救急病院的役割を引きうけている八木山動物公園では、第一期の上野動物園にいた状態が再現し、すでに三〇頭ものニホンカモシカが緊急収容されながら、ほとんどが半年以内に死亡してしまつたという、苦しい立場におかれています。

一九七〇年以來、全国のニホンカモシカ飼育園館と、文化財保護委員会、環境庁、日本動物園水族館協会の関係が、毎年集まつて、カモシカ会議を開いています。またその会議の決定として、多摩動物公園が飼育下のニホンカモシカ戸籍簿の仕事もはじめています。こうして、一九七三年三月三十一日には、全国でニホンカモシカを飼育しているところは十園館、飼育総数五十九頭で、このうち五四・二%にあたる三十二頭が飼育下で繁殖したものであり、また、そのうち飼育下第三世は十一頭を数えるに至りました。この数字は、

今年(一九七三年)の夏には、さらに大きくなりつつあり、第四世も生まれています。ここまですれば一安心というわけで、一九七三年の四月には、はじめての国外輸出として、大町山岳博物館の二頭が、中国の北京動物園に送られるところまできました。このようにニホンカモシカの飼育、繁殖の成功はそれぞれの飼育の努力に加えて、全国の飼育者間での情報交換と、助けあいが実を結んだものといえることができるでしょう。

今年(一九七三年)の夏には、さらに大きくなりつつあり、第四世も生まれています。ここまですれば一安心というわけで、一九七三年の四月には、はじめての国外輸出として、大町山岳博物館の二頭が、中国の北京動物園に送られるところまできました。このようにニホンカモシカの飼育、繁殖の成功はそれぞれの飼育の努力に加えて、全国の飼育者間での情報交換と、助けあいが実を結んだものといえることができるでしょう。

全国ニホンカモシカ飼育頭数(各年3月31日の飼育頭数)



山と博物館 第18巻第8号  
 発行所 長野県大町市TEL②〇二一  
 印刷所 大町市下仲町 大町山岳博物館  
 定価 年額四〇〇円(送料共)(切手不可)  
 郵便振替口座番号(長野二二、二九三)

(多摩動物公園)